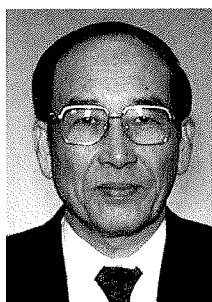


： 卷 頭 言 ：

信頼と責任を規範とする社会に

(財)日本植物調節剤研究協会 東海支部長 生杉佳弘



You are not alone. We love you, JAPAN. これは、心ある海外の方々からの大震災に遭われた東北地方の皆さんへの、さらに日本人に対する励ましの言葉である。

去る3月11日の午後、突然日本を襲った、嘗てないマグニチュード9.0という大地震。高さ40mを超える大津波が発生し、鉄筋コンクリート三階建ての避難所に逃げた人々をも容赦なく呑み込み、アッと言う間に多くの人々の人生を奪い、生き残った家族を不幸のどん底に落としこんだ。

そのような中で、世界中と言ってよいほどの多くの国の人々が、冒頭のような励ましのメッセージと共に、支援・援助の手を差し伸べてくれている。報道によると、日本人が心を通いあつて社会支援したカンボジアの寒村の人達からも8万円が贈られてきたという。年収が7万円というから、日本に置き換えると600～700万円という大変な金額になる。また、台湾の人達は、世界に先駆けて150億円という多額の支援金を届けてくれた。被災された皆さまにお見舞い申し上げますと共に、この様なニュースに接する時、「人の心を動かす本質は、一体何なのだろうか」と改めて思う。

さて、「食」に始まった「安全・安心」という言葉は、いろいろな分野や場面で叫ばれて久しい。「安全」は、科学的見地からみたもの、「安心」は、人がそれを如何に信じて納得するかという心理的な要素である。それが今、心許ない状況にある。

今回の東日本大震災で、福島第1原子力発電所の原子炉がコントロール機能を失い、附近の住民は強制的退去を余儀なくされるという過去に類のない「人為的災害」をもたらしている。新

聞報道によると、高台を25mも削り取って地盤を強化し地震に備えたという。そのような震度の地震が起きた時に、どのような津波が襲って来るか、明治の大津波のことは考慮に無かったのだろうか、不思議に思う。

また、先日来、朝鮮料理の一つ生の牛肉(ユッケ)を食べた人達の百人以上が食中毒に罹り、4人が死亡、多数の人が入院加療しているという。日本人が牛肉を食するようになった明治以降、生肉には細心の注意を払ってきたことを思い出す。安価を売り物にしていた当該店は、安全性に対して余りにも無頓着で、かつ無責任な経営をしていたものだ。昔から、老舗は「顧客の信用」を経営の柱としてきたことが頭をよぎる。現在の日本社会は、過去の経験から得た貴重な教訓を、経済合理主義という言葉の下に忘れ去っているのではないか。「安全と安心は自分自身の責任で確保する」「安心と安全を手に入れるには、高額な費用が必要」という世の中になってしまっているのではないかと、改めて感じる。

「安全」と「安心」は、それぞれの場面に携わる人々が、それぞれの責務として真摯に取り組む姿勢、言い換えれば、「責任」と「信頼」から生まれてくるものと思う。責任は、土下座して謝って果たすものではないし、金銭で賠償して済むものではない。失ったものは、元には戻らない。

私達が携わっている植物生育調節剤の分野においても、部外者から常に「信頼」され続けられるよう、自らが「責任」の持てる技術と商品の開発・普及に努めていきたい。

「信頼される」「責任を果たす」この二つの言葉が、ごく普通に「日本人の社会行動規範」とされる世の中になってほしいものである。